

みんなでつくる、
よりよい世界。



はじめまして! JICA (ジャイカ)

会おう前と、出会ってからの物語

ある国では
子どもが病気になって
死んでしまうことが
それほどめずらしい話ではありません。
とくに「マラリア」などの感染症は
とても身近な病気で
お父さんもお母さんも
近所の友だちも
みんな病気になってしまいました。

薬があれば命を救えますが
その国はとても貧しく、買うお金がありません。
正しい知識を伝えれば感染を止められますが
その国では子どもは学校に行けず
読み書きができる人もあまり多くないのです。
「自分たちの力だけでは
この苦しみを乗り越えることができない」
その国は日本に協力を求め、
JICA (ジャイカ) の国際協力がスタートしました。



JICAは、その国でどんな協力が必要かを調べ、日本から予防接種のワクチンや医療器具を送ったり、医師や看護師を派遣したり、診療所の建設に必要なお金を貸して、現地の人々と一緒に感染症の拡大を防ぎました。でも、JICAの協力は、それだけでは終わりません。その国が、自分の力で感染症を解決できるようになることが大切と考え、人を育てたのです。

現地の人々に感染を防ぐ方法や注射器の使い方、病気を予防する知識などを教え、教えられた人が、今度は教える立場になって知識や経験を国全体に広めていきました。そして、その国はもう二度と感染症で苦しむことはありませんでした。





地球に生きる私たち、
私たちの未来はつながっています。

東ティモール

地球全体の問題に取り組む

環境破壊や食糧不足、感染症、そして紛争やテロ…。
国境を越える地球全体の問題は、
ひとつの国の力だけでは解決できません。
だから、世界各国が力を合わせて、
これらの問題に取り組んでいます。
JICAは、世界のすべての人々の「よりよく生きたい」
という願いを実現するために活動しています。



世界の中の日本、 日本の中の世界

現代は、人、モノ、お金、情報が国境を越えて移動する時代です。私たちの日常生活の中にも、海外から輸入されたものがたくさんあります。

例えば、日本の食糧自給率はたったの40%で、残りを海外からの輸入に頼っています。石油は、99%以上を海外に依存しています。こうして日本は、生活に必要な物資を世界の国々に頼っていますが、その中には、多くの開発途上国が含まれているのです。

開発途上国と日本人を むすぶJICA

JICAは、日本政府の開発途上国支援（政府開発援助）を実施する機関です。

上下水道や道路などの人々の生活を支える設備の建設に必要なお金を低利で貸したり、農業などの専門知識を持つ日本人を開発途上国に派遣したり、外国から人々を日本に招いて防災や医療などの研修を行います。また、井戸や病院や学校もない、最も開発が遅れている国には、それらの施設をつくるためのお金を提供します。

実は日本も、戦後、病気や食糧不足で苦しんでいたときに、世界各国の援助を受けていました。東海道新幹線も外国から借りたお金でつくられたのです。



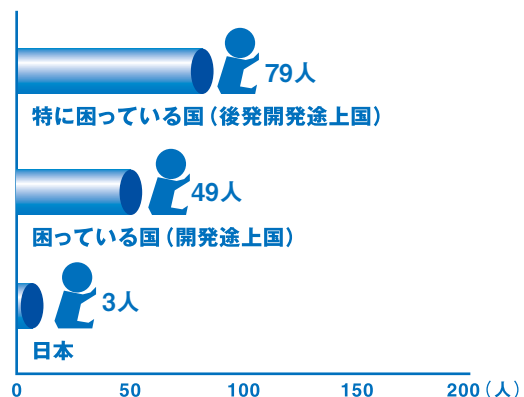
「開発途上国」とよばれる国

世界で最も貧しく弱い立場にあるのが「開発途上国」とよばれる国々です。開発途上国とよばれる国は約160カ国。これらの国では、「安心して飲める水がない」「子どもが勉強をさせてもらえない」「病気で亡くなる人が多い」などの問題が人々を苦しめています。

一人ひとりの命の尊厳が守られ、安心して生活を送れるように、その国が必要としている施設や制度をいっしょにつくっていく。それがJICAの国際協力です。開発途上国の貧困をなくし、社会と生活を安定させることが、日本と世界の安定につながるのです。

5歳まで生きられない子どもの割合

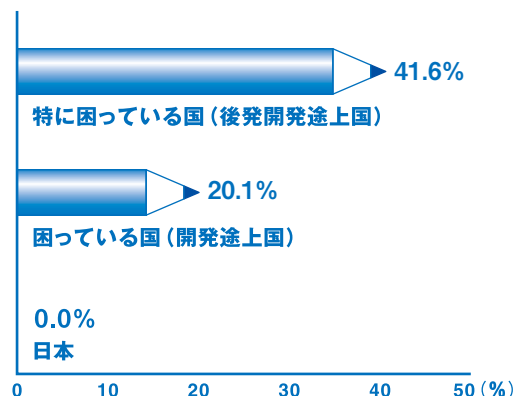
(出生1000人当たり／2013年)



<出典:UNDP人間開発報告書2015>

文字の読み書きができない人の割合

(2005-2013年)



<出典:UNDP人間開発報告書2015>



いっしょに、ひとつの目標に向かって。

カンボジア

今村健志朗 / JICA

水が出た！

蛇口をひねるといきおいよく水がでた。
水道が引かれるまでは、子供たちが川に水を汲みに行っていたんだ。
でも、せっかく汲んできた水は、にごった水だった。
浄水場と水道が普及したおかげで、
透明で安全な水を毎日手に入れることができるようになったんだ。
水くみがなくなって一番うれしいのは、
学校に行けるようになったことかもね。



「安全な水」ってわかる？

想像したことがありますか。毎日、何キロも離れた井戸や川まで水をくみに行く生活を。何度も往復するので、一日がかりです。

その上、せっかく運んできた水に、細菌や寄生虫が潜んでいることもあり、水に関わる病気で多くの子どもが世界で亡くなっているのです。

JICAでは、病気のおそれがなく、安心して飲める水のことを「安全な水」とよんでいます。人口の増加と産業の発展などで、世界的に水不足と水質汚染が進み、6人に1人は「安全な水」が手に入らず、困っています。

飲み水や炊事、体や衣服を洗うために1人1日20リットルの水が必要とされている中で、水道が完備されている日本は世界では大変恵まれている国なのです。



水道とは縁のない生活

世界では、まだたくさん子どもや女性が、このように水を運ぶ生活をおくっています。水は人間だけでなく、家畜や作物などを育てるためにも必要なものなのです。(ガーナ)

施設の建設から、管理方法まで協力

水のない場所に水を運ぶ。まずは水源の確保から始めなければいけません。そのためには、湖から水を引くポンプを設置したり、井戸を掘ったりする設備が必要です。さらに、そうして得た水をより多くの人々の手に行き渡らせるためには、給水塔や上水道システムの建設が必要です。

アフリカのある国では、JICAがお金を提供して給水塔をつくりました。「もう2時間かけて水くみに行かなくてもいいんだ！」住民はみんな大喜びです。ひとつの給水塔が、何百人もの人の生活を、がらりと変えたのです。

さらに、JICAは住民たちが給水塔を自分たちの力で守っていけるよう、日本から専門家を派遣して、正しい使い方や維持管理の方法について、住民たちと一っしょに考えました。その結果、住民たちは、水管理組合をつくって、利用者から水道料金を徴収し、学校や病院への無料水道を確保しました。



給水塔を守るのは住民

給水塔をつくるだけでなく、村の人が自分の力で管理していけるよう、機械(ポンプなど)の修理方法を教えたり、水質を検査する技術を伝えて「人材の育成」に協力しています。(セネガル)

みんなの生活がガラリと変わった

水は女性にうれしい変化をもたらしました。今までは妊娠していても、重い水桶を運ばなければならず、流産することもありましたが、今では安心して赤ちゃんを産むことができるようになったのです。

また、水くみに費やしていた時間を利用して、手工芸などで現金収入を得るようにもなりました。

子どもたちは、トイレのあとや食事の前に手を洗うことができるようになって、下痢や皮膚病などが減りました。何より、学校へ行く時間ができ、読み書きを学べるようになったのです。

このように「安全な水」は、単に飲み水の確保というだけでなく、住民たちに「よりよく生きていくための活力」をもたらしてくれたのです。



農村の女性たちの笑顔

家の近くで洗濯ができる喜びは、水くみ労働を続けてきた女性や子どもたちにしかわからないかもしれません。「安全な水」をきっかけに、住民たちは少しでも暮らしを安定させようと、希望を持って努力をはじめています。(ザンビア)



アフガニスタン

女性だって学びたい、働きたい

アフガニスタンは、紛争が長く続いた国でその間、女性はずっと差別を受けていました。勉強することも、仕事をする 것도許されなかったのです。紛争が終わり、新しい政府ができて、希望が見えてきました。JICAは、女性をもっと社会に出て、活躍できるように女子校をつくったり、読み書きを教える識字教室を開いています。学んで、とってうれしいことなんですね。



ふつうの人々を巻き込む「紛争」

人間にとって、命が一番大切なものです。それが奪われる恐怖を人々に与えるのが、紛争です。

国と国が起こす戦争、そして同じ国の中でも民族や考え方の違いで起きる衝突などに、ふつうの人々が巻き込まれ、命を奪われます。

大切な家族や住む家を失い、道路や病院、学校などが壊され、心身ともに大きな痛手を負いながらも、人々は自分たちの生活や国を立て直そうと、希望に向かって歩みはじめます。そこでJICAの協力が必要となるのです。では、国をもう一度立て直すというのは、どんなことをするのでしょうか。



S.サバウン/JICA

すべての子どもたちが 教育を受けられる国へ

紛争が20年以上も続いた南アジアの国、アフガニスタンで、JICAが特に力を入れて協力しているのが「教育」です。

一人ひとりが人間らしい生き方をし、自分の手で未来を切り開くためには、知恵と能力を身につける「教育」がとても大切だからです。

JICAはまず、学校が壊され、屋根のない教室やテントの中で、寒さにふるえながら授業を受ける子どもたちに、新しい校舎を建設し、机やいすを届けました。

子どもだけではなく、これまで差別を受け、勉強や仕事をするのが許されなかった女性たちに対して、読み書きなどを学ぶ機会をつくり、社会的地位の向上につなげています。

十分な教育を受けてこなかったのは、先生も同じです。子どもたちに有意義な授業を行うことができない女子教員のために、JICAは専門家を派遣したり、日本に研修で招いて、人材育成にも取り組んでいます。

ふたたび紛争を起こさないように

JICAは、紛争で傷ついた人々の復興を支援するとともに、ふたたび紛争を起こさないよう、予防に向けたさまざまな支援も行っています。



みんなの願いを新しい憲法に託す

伝統的なイスラム法を尊重しながらも、「人権の尊重」「男女平等」などの精神を新しい憲法にとり入れるために、JICAから派遣された日本人の法律学者がアフガニスタン憲法委員会に参加しました。



S.サバウン/JICA

兵士だった人が仕事を持てるように

兵士がふつうの市民として社会復帰できるように、JICAは職業訓練に必要な施設や機材を整備したり、日本から職業訓練アドバイザーや電気配線、板金、溶接などの専門家をアフガニスタンに派遣しています。

世界には、いろいろな問題がある。JICAは、世界

飢餓の苦しみを解決するために



佐藤浩治 / JICA ウガンダ

世界には食べるものがないために、栄養不足や飢餓に苦しむ人々がたくさんいます。農作物の疫病や水不足、自然災害などが原因で十分な農作物の収穫を得られない国に、私たちは、その土地にあった農作の方法や、品種改良技術の指導、また、安定的な農業用水の供給のための設備作りの協力をしています。

その他の協力

- 漁業の町で貝の養殖を教える協力
- 家畜の病気を防ぐ協力

みんなが学校に行けるように



渋谷敦志 / JICA エチオピア

世界には、小学校に行きたくても行くことができない子供が約7,500万人います。子供たちが学校にいけない最大の理由は貧困です。私たちは、貧しい国で学校を建設したり、教材を作って広める協力を行っています。世界中の男の子も女の子も公平に教育を受けられるような世界を目指しています。

その他の協力

- 学校を運営する制度やしくみづくりで協力
- わかりやすい授業の仕方を先生に指導する協力

経済的に自立した社会をつくる



谷本美加 / JICA スリランカ

世界には、仕事をしなくても技術がないために仕事を得ることができなかつたり、そもそも働き口がない国があります。私たちは、働き口を増やし、その国の産業を活気づけるために地域の特産物を加工し、商品として外国に輸出する方法を教えたり、観光産業で住民が収入を得られるように協力を行っています。

その他の協力

- 生産物の品質の向上や管理の方法を教える協力
- マーケティング調査や流通の方法を教える協力

食糧不足

不十分な教育

未熟な経済発展

貧

劣悪な生活環境などがからみ合って、なかなか苦しみから抜け出すことができません。

の国々とともに問題の解決に取り組んでいる。

困

「貧困」は、さまざまな問題を引き起こします。
不十分な教育や医療、食糧不足、

環境の悪化

インフラの未整備

保健・医療の未整備

環境を守りながら生活を営めるように



今村健志朗/JICA トンガ

豊富な自然に恵まれている国では、観光客が利用するための施設をつくることによって引き起こされる環境破壊の問題が深刻になっています。私たちは、貴重な自然を守りながら、観光客も楽しめる仕組みを現地の住民とともにつくっています。この取り組みにより、住民の生活が豊かになることが期待されます。

その他の協力

- 森林で火災が起きないように予防する協力
- ごみを収集する仕組みをつくる協力

道路をつくり、人とモノの移動を可能にする



今村健志朗/JICA ボリビア

人とモノの移動に必要な道路や橋がないために、人々が病院に行くことができず、農産物を町に売りに行くことが出来ない地域や貧しい国があります。道路や橋をつくる協力をすることによって、地域の経済活動が活発になり、住民の暮らしがよくなっています。地域の開発が貧困の解消に役立っています。

その他の協力

- 上下水道を整備して衛生的な生活環境をつくる協力
- 電話が通じるように配電盤を整備する協力

生まれてくる命を守る



今村健志朗/JICA パレスチナ

世界では、毎年、1,000万人近い子どもが5歳を迎える前に亡くなっています。予防接種や薬があれば、簡単に予防し治療することができる病気で亡くなっているのです。私たちは、世界のすべての子どもが基本的な治療が受けられるように、病院や保健所などの施設を充実させる協力をしています。

その他の協力

- 結核などの感染症を防止する協力
- 母子手帳で赤ちゃんの成長を支える協力

JICAは、それぞれの問題に対し、幅広い分野から協力をを行っています。このほかにも、開発途上国の事情に合わせて、多くの協力をを行っています。



日本で学んだこと、帰ったらみんなに伝えたい。

茨城県つくば市

日本の技術が世界で役立っています

アフリカや東南アジアなどの技術者が
つくば市にあるトラクター工場を訪れて
エンジンの分解や組み立ての方法を学んでいます。

「母国には自然豊かな土地がある。機械化で農業をもっと発展させたい」
その願いをかなえるために、彼らはここで9カ月間
機械の使い方をしっかりと身につけ、帰国後、農家の人たちに伝えます。
日本の技術がこんなふうに世界に役立っていること、知っていましたか？



アフリカのマラウイから
研修に来た

アイビーさんの話

「私たちは10カ月間の研修を通して、野菜の育て方や肥料の作り方など、今まで知らなかった多くの技術を学んでいます。マラウイは、日本にならって『一村一品運動』を進めていますので、帰国したら、農家の人たちに日本で勉強したことを伝えて、みんなで地域の発展をめざしていきたいです」(写真中央の女性)



国の将来のために、 勉強しに来ました



名古屋市消防学校 担当指導員さんの話

「途上国の消防官や消防学校の教官に火災予防について教えています。みんなとても勉強熱心で、興味があると必死に食らいついてきます(笑)。自国では消防技術の推進指導者になる人たちですから、ここでは『火災には予防がとても大事だ』という思想を学び、身につけてもらっています。あとになって必ず役立つと信じています」

皆さん、とても熱心で 驚きました

途上国の方が 日本で研修を 受けています

JICAの活動は、海外だけではなく。

途上国から、国の将来を担う人々を「研修員」として日本に招き、先端技術や日本の風土に根ざした伝統技術などを伝えています。

研修は約600コースあり、年間約1万人の途上国の方が、日本全国の自治体や企業、大学などで研修を行い、地域の人たちとも交流しています。帰国後は自分が講師となって、日本で学んだことを母国の人々に伝えます。研修員の中からは、国を代表する要人に育った人も多く、日本での研修は途上国の発展に大きく貢献しています。



新潟の小学校を訪問し、子どもたちとの交流を楽しむアフガニスタンの人々



JICA海外協力隊

アフリカ大陸、赤道直下のウガンダという国で、PCのリペア実習を行う青年海外協力隊の隊員。ICTの“いま”を織り交ぜながら、中学生に実践的な知識を伝えます。移り変わりの激しい分野で情報と技術を操り、いつまでも変わらぬ「考える力」を育てることが活動です。

日本から世界へ

その国のために奮闘するJICA海外協力隊

「世界を変えたい」「世界を良くしたい」。JICAの国際協力では、そんな熱い思いを持ったJICA海外協力隊も大きな役割を果たしています。

20歳から69歳を対象に毎年2回募集しており、いろいろな分野の中から、自分の得意なことや経験してきたことを生かせる職種を見つけて参加。これまでのべ5万人もの隊員たちが日本と途上国を繋いでいます。

恵まれた環境とはいえない途上国での暮らし、言葉や習慣の違いで、隊員の活動は苦勞の連続です。でも、現地の人たちが笑顔で「ありがとう」と言ってくれたとき、それまでの苦勞は大きな達成感に変わります。

多くの隊員が「見知らぬ土地での協力隊活動は、自分自身の輝きや可能性の発見にもつながる、かけがえのない経験になりました」と話しています。

詳しい情報は <https://www.jica.go.jp/volunteer>



国際緊急援助隊

2017年メキシコで発生した地震では多数のビルが倒壊。救助チームは、複数の現場で昼夜継続して救助活動を行う、国際機関から「ヘビー」級に認定されているチームならではの活動を展開しました。市民の皆さんからは温かい声援や差し入れが届けられ、撤収時には多くの「アリガトー」の聲が寄せられました。

世界中の災害に すぐ駆けつける

地震や津波、感染症など、大きな災害や病気が発生したとき、JICAは「国際緊急援助隊」を結成し、現地に速やかに派遣する役割を担います。

災害現場で生存者の救出にあたる「救助チーム」のメンバーは、警察や消防、海上保安庁から集められます。

被災者の病気やケガの治療を行う「医療チーム」や、病気の流行を抑えるための「感染症対策チーム」のメンバーは、参加を希望する医師、看護師、薬剤師等のリストを事前につくり、その都度呼びかけて決定します。

このほか、災害がそれ以上拡大しないように処置したり、再発を防ぐためのアドバイスをする「専門家チーム」があります。

あなたの「？」を「！」に JICA地球ひろば

体験ゾーン開館日：平日・土日祝日 10:30~18:00
(第1・第3月曜日、年末年始定休)
場所：東京都新宿区市谷本村町10-5
フリーダイヤル：0120-767278
電話：03-3269-9090 FAX：03-3269-3419
E-mail:chikyuhiroba@jica.go.jp
URL:https://www.jica.go.jp/hiroba/



JICAでは、日本と世界のつながりや、開発途上国に対する理解を深めてもらう活動をしています。是非一度お越しください。

なごや地球ひろば

体験ゾーン開館日：火曜~日曜日 10:00~18:00
(月曜日、年末年始、国民の祝日定休)
場所：名古屋市市中村区平池町4-60-7
電話：052-533-0220 FAX：052-564-3751
URL:https://www.jica.go.jp/nagoya-hiroba/

ほっかいどう地球ひろば

体験ゾーン開館日：平日 10:00~17:30
(土・日、年末年始、国民の祝日定休)
場所：札幌市白石区本通16丁目南4-25
電話：011-866-1515 FAX：011-866-1516
E-mail:hokkaido@jica.or.jp
URL:https://www.jica.go.jp/hokkaido-hiroba/

※開館時間は日により異なりますので、ご来館前にご確認ください。

最新の情報は

JICAウェブサイト、ソーシャルメディアをご活用ください。



JICAとは

名称：独立行政法人 国際協力機構

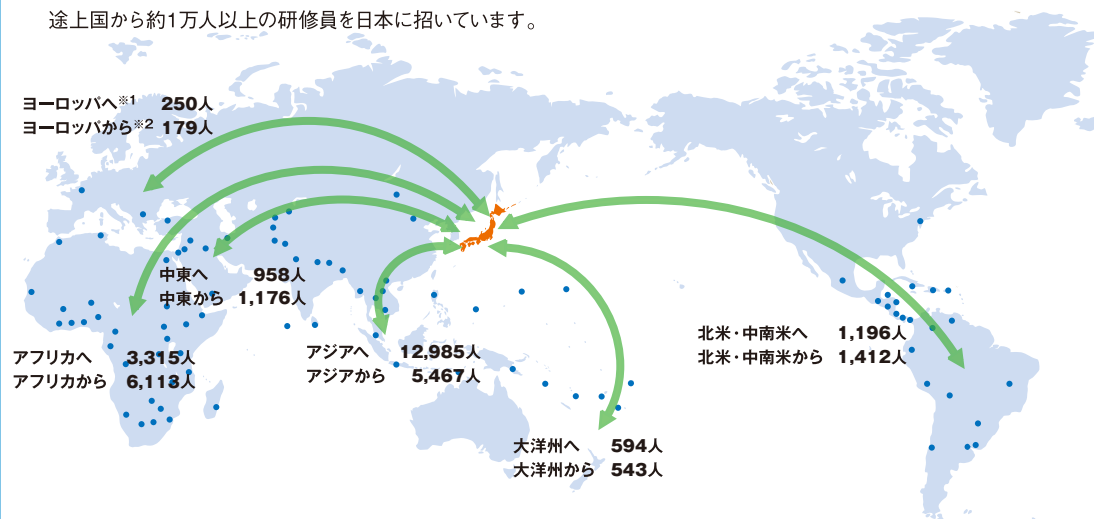
略称：JICA(ジャイカ・Japan International Cooperation Agency)

代表者名：理事長 北岡伸一

設立年月日：2003年10月1日

所在地：＜本部＞ 東京都千代田区二番町 5-25 二番町センタービル

JICAが協力している国は、約150カ国。
毎年約2万人の日本人(専門家やボランティア)を海外に派遣する一方、
途上国から約1万人以上の研修員を日本に招いています。



●はJICAの海外拠点

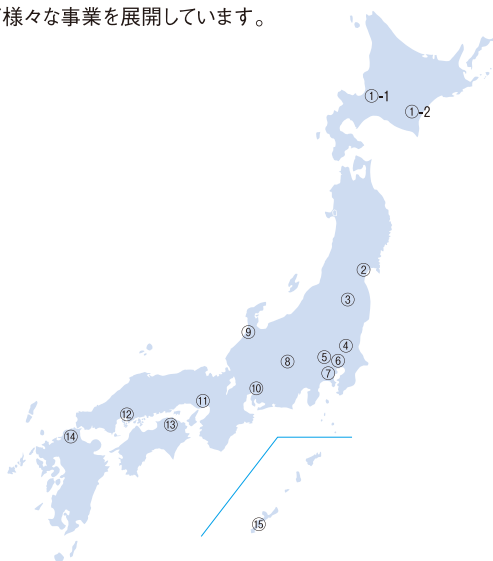
※1 専門家、調査団、協力隊、その他ボランティアの合計。新規分。

※2 研修員新規分。 ※全世界・国際機関は除く。

出典：国際協力機構
年次報告書2019

国内拠点と地球ひろばが窓口となり、各方面と連携して様々な事業を展開しています。

- | | |
|-----------------------------|----------------------|
| ①-1 JICA北海道(札幌)／ほっかいどう地球ひろば | Tel. 011-866-8333(代) |
| ①-2 JICA北海道(帯広) | Tel. 0155-35-1210(代) |
| ② JICA東北 | Tel. 022-223-5151(代) |
| ③ JICA二本松 | Tel. 0243-24-3200(代) |
| ④ JICA筑波 | Tel. 029-838-1111(代) |
| ⑤ JICA東京 | Tel. 03-3485-7051(代) |
| ⑥ JICA地球ひろば | Tel. 03-3269-2911(代) |
| ⑦ JICA横浜 | Tel. 045-663-3251(代) |
| ⑧ JICA駒ヶ根 | Tel. 0265-82-6151(代) |
| ⑨ JICA北陸 | Tel. 076-233-5931(代) |
| ⑩ JICA中部／なごや地球ひろば | Tel. 052-533-0220(代) |
| ⑪ JICA関西 | Tel. 078-261-0341(代) |
| ⑫ JICA中国 | Tel. 082-421-6300(代) |
| ⑬ JICA四国 | Tel. 087-821-8824(代) |
| ⑭ JICA九州 | Tel. 093-671-6311(代) |
| ⑮ JICA沖縄 | Tel. 098-876-6000(代) |



各国内拠点のウェブサイトはこちらへ <https://www.jica.go.jp/about/structure/domestic/>



独立行政法人 国際協力機構 広報部

〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル TEL: 03-5226-6660～6663(代表) URL: <https://www.jica.go.jp/>

2021年12月